

正直な話、この、今の生活様式の中で着物というのは非常に厳しい状況で、観光的にはなかなか活用されてないところがあります。

そこで去年からお茶屋体験と、お茶屋遊びの体験教室をはじめました。昼は8千円、夜は1万8千円でおこなっているのですけれども、非常に盛況で、日を増やしても、増やしても、どんどん満杯になって、もう今はお断りしてるような状況です。やはり綺麗なんです。半分は女性です。で、着物に対するあこがれとかは必ずあるというふうに思っています。去年、京都館で変身舞妓の企画をやりました。初め、11時から5時までということで実施したのですけれども、それもどんどん申し込みがあって、朝8時から夜8時まで、それでも受けられなくて2班に分けました。もうそれでも当日は全部断りました。

75歳の方から、「昔からの夢でした。私もよろしいですか。」と、お問い合わせがありました。「75歳の舞妓さんっていたかな？」とも思ったのですが、やはり、夢をかなえるのがやっぱり京都館ですから、その方にも体験をしていただきました。着物というのは、今は観光的に十分活用出来てはいるのですが、必ず需要はあると確信しています。

あと、五感ですね。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚です。で、視覚。これはもう、見て綺麗という世界ですから、もう無限にあります。

今日は、花を入れてきました。花のお問い合わせというのも非常に多いです。

聴覚。これは、聞くほうですけれども、平安神宮の薪能などの邦楽と、京都の伝統的なスポットを、くっ付けると何か出来るかなあと考えてますが、今、実はこの聴覚を利用した観光資源というのではないです。

嗅覚、匂うほうですけど、香道を入れました。これは若い女性に人気があるのですが、まだまだ都市の魅力を支えるというところまで行ってません。

そして、味覚。これは先ほどのように言いました、もう京都の代表的なものです。

次に触覚ですが、体験教室ということで、5年ぐらい前からマスコミのほうで取り上げていただいています。京都の深みを知ってもらおうということです。

五感の中ではですねえ、見るとか食べるとかというのは、もう大分成熟しています。

今は、体験するというのが開発中と。聞くとか匂いの部分ですね、そこらはまだまだ出来てないといったところです。あとは、心と身体ですけども、今日は東大寺の執事長さんもお越しになっていらっしゃるんですが、「心の乾き」というのは絶対あり得ますね。電話でもものすごく問い合わせが多いです。

もう1つのポイントで、「持っているものをより良く見せる」というのがあります。人為的につぎたそうと思ったら大変なんですよ。そこで、京都といいますが、やっぱり文化遺産。歴史的、宗教的・哲学的な遺産です。で、次が祭り。葵祭り・祇園祭り・時代祭りです。

祭りといいますが、行政が作り出したものと違いますから、本当に一生懸命やってくれるんですよ。そこがイベントとは全く違うところです。あとは、文化ですが、これももう無限にあります。絵になるものとして、お茶、生け花をいれてきました。これはもう絶対に楽しいんですよ。これをどうやって紹介するかというのは、今、京都館の大きな課題です。

次は、こういったものをどうやって掘り下げていくかということです。京都はやはり、歴史とか、そこに生きた人物。それと、もう1つは事件ですね。事件をピックアップする。どうしてその事件が起こったのか。起こらなければならなかったのか。そこを、現代と見比べると、今の時代と、非常に重なって映るところがたくさんあります。もうひとつはやはり、逸話のようですね。私も正直言って、本当かなという気持ちだったのですが、だんだん歳とってきますと、やはり自分が苦しい時などその逸話がですね、なんか教訓に聞こえたり、メッセージに聞こえたりするんですね。そういうのがパッと人の心に入るとなかなか忘れられません。

「時の概念を大切にする」ということですけども、その季節が来たらですね、みんなその気になってくれます。こっちに向かせようとする、ものすごい力技なんですよ、力がいらいます。で、チャンスをですねえ、どうやってとらえて、人の心に働きかけていくのかという、その時っていう

のは、非常に大きな武器です。

次に、2002年の新事業についてということで、5つ紹介させていただきます。1番目が「光をテーマとした事業」。それと、「二条城の築城400年」、「北野天満宮の1100年」、「建仁寺の800年際」、で、大原三千院で本尊が初めて公開されるという5つです。

まず、光をテーマとした、京都市と商工会議所、京都府、観光協会などが合体して、何とか新しい観光行事を行おうということに、取り組んでいます。

奈良県でも光の事業を行っておられますけども、何とか、真似にならないように、やっていこうと思っています。夏から秋にかけて、2週間ぐらい開催しようと思っています。詳細については、これからまた決めていきますので、順次、報道発表させていただきます。

最後に、京都館のことに、触れさせていただきます。京都館、先ほど言った、観光と物販と、あと展示関係をやっています。物販のほうは、食材・和装小物・織物・漆器など約3000品目を、2、3週間ごとに、出来るだけ順次変えていっています。見ていただけるだけでも面白いですし、一番京都を勉強出来るところではないかというふうに思っております。

観光も、観光コーナーを脱皮して、何とか京都の情報全て、歴史的な事件とか、人物とか、料理とか、工芸品とか、そういったものの相談を受け入れられるようになるということ願っています。

約250種類ぐらいのパンフレットを常時備えております。展示ですが、1カ月に1~2回、テーマを定めて、ちょうど今、「着物の直し」をやっています。

結婚式とか、成人式に作った着物を、もう活用しないっていうのがありますけれども、そういったものを貴重に直したり、屏風に作り変えたりとか、もっともっと、もう着物というのは、もう使わないといたら、カバンとかコースターとかランチョンマットなどに作り変える。まあそういったことを今やっております。

最後に、今日はマスコミの方が非常に多いということをお伺いしていますので、皆様への直接サービスしてありますが、写真ポジを400種類ぐらい持っております。いずれも、写真家の横山健蔵先生の作品です。単行本への使用はダメですが、月刊誌とか、週刊誌とか、あと季節ごとに出される季刊誌ですね、そういった雑誌関係に、無料でお貸し出しさせていただいております。

②京都観光文化振興会代表理事・同志社大学文学部教授

廣川 勝美氏

「源氏物語と京都」

廣川でございます。僅か15分でございますので、スライド用意しておりません。申し訳ないけれども、まあ耳で聞いてもらいたと思います。

私どもの、京都観光文化振興会というのは、お手元の中の資料をご覧いただきながら、何を考えるかということ、お聞き取りいただきたいと思っております。

それで、今日、あとでもう1度、発言する機会あるようでございますので、「源氏物語」というものに絞ってですねえ、プレゼンテーションをさせていただきたいと思っております。

最近、映画で、「源氏物語」というのが撮られました。10月に実は、監督さんの堀川敦厚さんに、商工会議所としてご講演をいただきましたが、その時も、もう少し京都は「源氏物語」というものに光りをあててはどうかという。まあそういうふうなお話などを頂戴いたしました。

「源氏物語」といいますと、先ほど、井戸事務局長のプレゼンテーションの中にありましたように、やはり「宇治」というふうに、なるわけでございますが、勿論これも大事なところでございますが、物語そのものは言うまでもなく、平安京の物語であるわけです。で、京都に来て、そしたらその「源氏物語」をたどることが出来るのかというと、宇治のように整えられているわけではございませんので、そういう気持ちがいよいよ多いわけでございます。

先ほど、北村館長のお話の中で、どう掘り下げるかというふうに言われました。

一言で言うならば、「物語」だと。こういうふうに思っております。ストーリーといってもかま

いませんが。何か1つの物語を持って、或いは、テーマと言い換えてもかまいませんけれども、観光するということがあるのではないかと思うわけでありませぬ。

そして、その中で、何を見つけてくるかという、結局、「自分とは何か」。

或いは、「この国のこの形」とか。或いは、「そこに於ける自分」でもいいわけでありませぬ。或いは、これが外国の方であれば、そことの対比の中ですな、自分を見つめていく。これが僕は「旅」だと思ってるわけでありませぬ。

そういうこの「物語」というふうなものの1つとしてですな、古典的な物語があると思ってるわけでありませぬ。それがまあ「源氏物語」でございます。で、言うまでもなく「源氏物語」は、全部で五十四帖でございます。記述物語から始まっているわけでありませぬが、それをどう京都で、見つけ出していくのか。ということでございませぬが、私は、京都は「物語」と言いました。その「物語」をピックアップしていく時に、ひとつの頼りになるものがあると思ってるわけでありませぬ。

それは「地名」でございます。「地名」というふうなものが、まあ広々と使ってるお寺の名前も含めて「地名」と言わせていただきますが、「地名」というふうなものが、「物語」を記憶してるのだと。そういうふうにご理解していいんではないかと思ってるわけでありませぬ。

或いは「地名」の周りに「物語」が集積してきている。こう言ってもいいのかも知れませぬ。ですから、「源氏物語五十四帖」を、そういう意味での地名の連鎖というふうに取り出すことが出来ないだろうかというのが、1つの提案でございます。

理屈を述べる前に、具体的なことで申し上げますが、例えば「源氏物語五十四帖」をですな、ずっと拾い出してみますと、例えば最初の巻のところですね。皆さん方もご承知のとおり、光源氏の母妃「桐壺更衣」が亡くなります。そのところで、もちろん舞台は五条であり、或いは光源氏の二条院でありますけれども、で、そういうふうな地名もございませぬけれども、どこに葬られたかという、と、「愛宕」というところに葬ったわけでありませぬ。

今の「愛宕」というのは、どこかと言いますと、東山の「大谷祖廟」とかございませぬが、もう少し、あのあたり全体が、例えば「鳥辺野」という名前あるとか、「愛宕」とかというの、そういう古代の羽振りの地でございます。で、ちょうどそのあたりにですな、「珍皇寺」、珍しいと天皇の皇という字ですが、そういうお寺がございませぬ。ちょうどそのあたりは、「六道の辻」といまして、あの世の境目となっている。そこに「愛宕珍皇寺」というお寺が現在ございませぬ。建仁寺派のお寺でございますが、例えば、そこに、もちろん「源氏物語」も、その時代のものではありませんけれども、ひとつの手がかりがあるのではないかと思っております。

或いは、次の町に行きますと、光源氏が中の品、中流の女性と知り合うところでありませぬ。ご承知の「空蟬」でございます。これはどこで出会ったかという、と、「中川」というところなわけです。紀伊の神の屋敷でいって出会う。「中川」という川が流れておりまして、現在、実は、寺町っていったほうが、お解りいただけだと思いますが、寺町通りでございます。これは秀吉の時代ですけど。その寺町通りの道路の下に、伊勢中川が暗渠になって流れています。ちょうど今の御所の東側でございます。もう少し絞るならば、有名な廬山寺がございませぬ。或いは西の方には、梨の木神社というのがございませぬ。そのあたりがだいたい中川でございます。

或いは、次の巻に行きますと、光源氏のご承知のとおり、北山に行きまして、「若紫」というひとりのかわいい女の子を見つけます。これは自分の愛している藤壺という人とよく似ている。血縁であるわけであたり前なんですけども。

それを見つけだします。で、「北山」ってどこなんだと。解釈した地図がございませぬ。例えば、今日、おみえの出版社の本を見てみますと、岩倉のほうをだいたい写真に扱ってるわけでありませぬ。これは角田博士のお説でございます。もちろんそれも、1つの場所だと思いますけれども、1つの解釈としては、江戸時代の人々は、それを鞍馬寺だというふうにご解釈してました。まあロケーションから見て、鞍馬寺でもいいんではないか、まあそういうふうにご思っております。

名所というものは、名のあるところ。この名のあるところというのが、「有名だ」というふうな現代語ではなくてですな、京都大学の高橋教授が、名称について、規定しておられますのが、いい

規定だと取り上げますけれども、1つはそこに何か伝承があること。出来事のお伝えがあることですね。もう1つはお庭があること、と言ってます。

もう1つは、事によってそれが、悪所といいますか、この世とあの世との境目であるとか。或いは鬼である、なんていいですけど。そういうふうな怪奇なものが出てくると。そういうものをそうして「名所」と言うんだ。というのが、高橋教授のお考えでございます。そういう意味での名のあるところというのは、「源氏物語」には、かなり見つけることが出来るわけでございます。

例えば、「仁和寺」というお寺がございます。あまりにも有名でございますが。「仁和寺」と「源氏物語」は、関係ないように皆さん方思ってるようであります。ところが、「源氏物語」としては非常に大事なお寺なんです。何かと申しますと、光源氏の正式の妻になった「女三宮」の父親は光源氏の兄であります。もちろん帝でありました。その帝が出家をする時に、こもったお寺が「西のお寺」「山の寺」と、こういう言い方します。実は言うまでもなく、「御室仁和寺」でございます。

もう少し歴史を言えば、それは「宇陀上皇」がモデルになっているわけでございます。そういうことから考えればすねえ、ストレートに物語に出てこなくても、そこまで掘り下げていけば、明らかに仁和寺もそういう関係があるわけでありまして。

それ以外に名前が出てくるものは、例えば、清水のお寺、或いは大覚寺である、或いは世川である。というふうにすねえ、これはお寺のほうから申しましたけども。神社のほうは、言うまでもなく、上賀茂・下鴨です。そのあたりが出てくるわけでありまして。で、その他、いろいろな意味で、数えていきますと、少なくとも40ヶ所ぐらいは、今、「名所」というべき、お寺であるとか神社であるとか、或いは、渡月橋のあたりの亀山公園であるとかです。そういうようなこと含めて、拾い出すことが出来ると思っております。

光源氏の邸宅であった、六条院でございますが、これは、源融の河原院がお手本になっておりますが、これも、各社の観光案内見ておられますと、だいたい、東本願寺さんの枳殻邸を挙げております。「朝鮮院枳殻邸」ですが。これはちょっと、率直に言って違います。石川丈山が枳殻邸を造る時に、「河原院」というものを、少しお手本にした、ということは言えるかもしれませんが。「河原院跡」ではございません。実は「河原院跡」というのは、今の五条河原町あたりでございます。

五条というのは、秀吉が、実は、あの五条の橋を造った。今の橋ではございませんけれども。今、松原というのが、四条と五条の間にございますが、それが旧の五条でありまして、平安京のだいたい六条にあたるところが今の五条でございます。で、そのあたりで、つい先年、「河原院跡」の発掘が行われました。もちろん一部でございますけれども。まあそれだけでなく、五条の橋のそばにすねえ、これは江戸時代の都の詠唱図絵などに出ておりますけれども、「河原院跡」というのがあります。今も榎の木があって、そのもとに碑が建っております。

で、そういうのを拾い出しますと、かなりの場所を廻ることが出来るだろう。と思ってるわけです。そういうものを含めながら、出来れば京都の東西南北、まあ、洛中がそうありませんけれども、むしろ、東・西・北・南の、まあ「郊野」と私、使いますけども、まあ「郊外」といってもかまいませんけども。そういう「旅」を楽しんでもらいたい。これが1つでございます。

しかも、その中ですねえ、申し上げたいことがございます。それは、六道珍皇寺と申しました、羽振の地でございます。そこをスタートにする。光源氏にとって言えば、母親の死でございます。そして、各地を廻りながら、最後は、実は瀬田川に到着いたします。で、当時、瀬川の僧で「源信大三」につきまして、そこのところで、五十四帖の締めがございます。言うならば、救済の道、もう少し言わしてもらったならば、「救いと癒しの道」がすねえ、京都の中から、浮かび上がってくるのと違うのかと。

それを「源氏物語」というひとつの物語に沿いながら、旅をしてもらいたいと。そういう提案をさせていただきます。

ちょうど時間でございます。ありがとうございました。

只今ご紹介いただきました、大仏さまのお膝元からやってまいりました、執事長の上野でございます。今日は本当にもう、何か暖かく、春がやって来たような感じで、実は、昨日、一昨日、20日からの、お水取りのその前行が始まっておりまして、まあ2人はもう15日から、もう前行に入っておるわけですが、2月一杯、その前行を積んで、3月1日から15日までの本行に向かってですね、まあ心身ともどこのトレーニングを行うわけでございます。

15日が終われば、関西にこの春が来るというふうなことで。しかし、最近ほんとにこの、暖かくなってきておりましてですね、行中には、その灯明の油をよく使うんですけども、その灯明の油が、こう凍ってですね、シャーベット状になったこともあるんですけども、もう今、その華瓶、花入れの水すら凍りませんから、暖かくなってきておることには、間違いはないと思います。

行中はですね、「紙衣」と申しましてですね、紙の着物を着るわけですね。紙というのは、まあ、清浄なものであるということと、それから空気は通さないものですから、非常にこの暖かいわけですし、防寒のアレも兼ねておるわけですね。だから、行中はその、毛糸とかですね、動物性のものは、こう身につけられないわけで、不浄なものとしてですね。だから、紙こう着ますと、よけいこう暖かくてですね、もうこう暖かかったら、もうその、ちょっと行にならないというような感じで、やはりピリッとした寒さがないとですね、やっぱり集中で出来ないわけで、そういう意味で、こう非常に寒い時期を選んでおるわけですが、

余談になるんですけども、去年でですね、お水取りの行法が1250回目を迎えたんです。これはまあ、1日も、いや1回も欠かさずにですね、まあずっと続いておる行法なんですけれども、天平勝宝4年(752年)、大仏さんがこの開眼した年に、このお水取りも、もう、まあ始められたんですけども、お水取りの行法が去年で1250回を迎えたんですけども、その開眼の法要は、今年が1250年になるわけですね。

えー、このまあ、人の年齢数えるのに満と数えとある。まあその違いかと思うわけですね。まあ余談になりましたけども、それで、752年、天平勝宝4年(752年)にその、開眼法要完成をいたしまして、まあ今年で1250年の節目を迎えるわけです。その後ですね、平安の後期に「平重衡の乱」それから、戦国時代にですね、「三好松永の乱」によってですね、その伽藍のほとんどが焼失するわけですが、これは、聖武天皇が大仏建立のその、造建の精神と申しますか、それはもう、ほんとに多くの方々ですね、国民全体がその大仏建立に取り掛かろうという、そういう主旨の元でですね、行われたわけです。

その後のこの2回の火災におきましてですね、多くの方々のご支援を頂いて、こうして元に戻っておるわけでございます。

絵画・書籍・工芸・古文書類などをいれますとですね、1万3千点ほど。そのうちで、まあ150点は国宝・重要文化財というように指定されておるわけです。それで、この1250年の節目を機会にですね、まあいろいろとその、慶讃行事を考えておるわけでございます。それで、この機会に、その創建当時それから、それぞれその再建の当時のご苦勞をですね、頂いた先人たちのご苦勞・努力をですね、こういう機会に、顧みて、そして、この不安定要素の多いですね、この現世のまあ指針と申しますか、明るい良い方向に、向くような、1つのこの機会になっていただければということで、まあいろいろ考えておるわけでございます。

その1つといたしまして、まず、この東大寺展についてですが、これは4月20日から7月7日まで、奈良国立博物館で行うわけでございます。

東大寺は過去にも昭和の大修理の終わった後、それから仁王尊像の修理の後、アメリカのシカゴ、最近ではドイツのケルンでも展覧会を行いまして、その帰国展を、東京の東武美術館でもやったりしてですね、頻りに展覧会をやっておるわけですが、そういう関係上、あまり同じようなものでしたら、皆さんも納得していただけないということですね。

今回は、かつてない大掛かりなこの展覧会を、まあ予定しておるわけでございます。まずこの、

奈良時代の東大寺、それから、廬舎那仏と華嚴の世界、それから、鎌倉再建ですね。それから、江戸再建。それから、これ4つの聖ということでですねえ、まあ東大寺はこのう、詔勅を出された聖武天皇と、それから、その開眼完成の導師を勤められた、「菩提僊那」、これまあ、インドのお坊さんなんですけども「菩提僊那」、それから、御開山の初代別当の一番最初の灌頂さんの、良弁僧正。それからいろいろ、この建立に裏方として働いていただきました行基菩薩、その4方を聖として非常にまあ大事な形で、崇めておるわけです。で、その4人に係わる始祖の文献等、それから、東大寺の考古学等。常設展として、東大寺ゆかりの彫刻を本館のほうでやるわけです。従いまして、総数250数点、もう本当に見切れないほど、今回出させていただくということになります。

主な出品物と展示期間というのが、今回、明治の時に海外、或いは国内に流出した寺外、東大寺以外のところに流出したのも、里帰りしていただくということで、予定しておるわけです。

最もこの中で、海外からの出品の中で、特にこのボストンから里帰りする「法華堂根本曼陀羅」が、これはもう、非常に素晴らしいものです。

それから、大英博物館、ベルリン国立インド美術館、その他からも里帰りするわけなんですけども、特にこの「法華堂根本曼陀羅」これは、あの、テロ以降ですね、ものすごい保険が掛けられて、この「根本曼陀羅」も1億ドルという保険が向こうから来たわけですねえ。これは掛け捨てですからねえ。それで、1億ドル、3千万円ほど払わんといかんわけですね。

こんなん掛け捨てやしねえ、展覧会したかて、そんなもんペイ出来ないということで、もう断念しようということで向こうへ返事出したら、何とかちょっとまけるからということでですねえ、それで今度帰ってくるようになったんです。だからこれ本当にもう、素晴らしいものですから、是非ご覧頂きたいと思うわけです。

それから、東大寺の秘仏の中で1年に1日しか、オープンしないものも、期間を限ってお出まじいただくと思っておるわけです。

まあもっとも、この法華堂の「日光月光菩薩」は、秘仏ではないんですけれども、法華堂から外へ出られるのはこれは初めてですので、これも是非拝んでいただきたいと思うわけです。それから、戒壇院の四天王立像も1度、奈良博のほうには出たんですけれども、4体とも出られるわけです。だから、出ておられる間は、戒壇院は閉めると。閉鎖するわけなんですけれども、4体ともお出ましになるわけです。だから、これは期間を限っておりますので、この期間内に来ていただかないと駄目なわけです。それから、木造の良弁僧正像ですが、これは12月16日、1日だけしかオープンしないんですけれども、この期間だけ。それから、この木造の僧形八幡神像ですねえ。これも、快慶作のほんとに素晴らしい像でございますけれども、これも10月5日、1日しかオープンしないんですが、この期間に限って、出陳するというのでございます。

これだけのものが出るということでございまして、本当に御堂でございましたら、その正面しか拝めないんですけれども、やはり博物館のほうへ出られたら、横、後からも拝めるということで、めったにない機会かと思うわけでございます。それともうひとつ、法華堂の裏のほうにいらっしゃる、金剛神像というのがございますんですけども、これも12月16日、1日なんですけれども、これはあの、この厨子からですねえ、外にもう出ないということが、判りまして、現場で拝んでいただくということになりまして、法華堂のほうに来ていただければ、ご覧いただけると。拝んでいただけると。こういうことになるわけでございます。

そういうことで、かつてない展覧会になりますので、是非、お越しいただきたいと。

それから、この1年間、東大寺はいろんな催し物を計画しておるわけで、特にこの詔勅を出された10月15日から5日間、大仏殿で慶讃大法要、それに伴ういろんなこの慶讃行事を大仏さんの前の庭で行うわけでございます。

東大寺以外の、来迎、或いは高野山、南都六大寺、それから尼寺、法華寺、中宮寺、円勝寺、そういう尼さん関係の方も出ていただいて、その法要を行うということで、それに伴って、夕方から、林英哲さんとかそれから東儀秀樹さん、それから、ジャズの渡辺貞夫さん等のコンサートも、夕方から夜にかけて、大仏殿の前で行う予定をしております。

まあ、修学旅行に行ったあの大仏さん。

「もういっぺん、ちょっとお参りしようか」という、そういう気になっていただくようにですね、いろいろ、この催しを考えておるといってごさいます。どうぞ、是非、お参りいただきたいと思ひます。ご静聴ありがとうございます。

④万葉古代学研究所副所長・奈良大学文学部助教授

上野 誠氏「奈良で万葉を体感する」

上野でごさいます。奈良からやってまいりました、上野でごさいます。なんか、私、上野道善様の横に座らせていただいて、奈良ではあり得ないことごさいます。奈良では「おかみ」と呼ばれている方でごさいます、もうこんな光栄なことはごさいません。

せっかくやって来ましたので、ご挨拶代わりに、わらべ歌を少し歌わせていただきます。

♪ ならの、ならの、大仏さんは、天火に焼けて、
ありゃどんどんどん、こりゃどんどんどん。 ♪

こんなもんで、いいでしょうか？

(拍手)

ありがとうございます。ありがとうございます。

で、私は今日は、難しい話はしませぬ。15分間で、「万葉集」のミニ講座をさせていただきます。「奈良で万葉を体感する」というものであります。

「万葉集」というものを、私たちはどういふふうにとらえるか。私は、言葉の文化財である。例えば、先ほど歌ったわらべ歌は、「天火に焼けて」というところがあります。これは、戦争によって、あの奈良の大仏さんが露座になって、天火、太陽の光にさらされていた時代のことであります。そういうような歌と言うものの中に、歴史の記憶というものが、埋め込まれているわけであります。

先ほど廣川教授は、「物語の中に埋め込まれた歴史」というものを語りました。

で、今日は、私は、これから約11分間ぐらいで、「万葉集と歴史」ということで、お話をさせていただきますと思ひます。

で、一番初めですね、まあこの歌はといふようなことで、話をさせていただきますと、「天皇の近江歌」、「春過而 夏来良之 白妙能 衣乾有 天之香久山、白妙能 衣乾有 天之香久山」で、ちょっと訳をつけてみました。

持統天皇がおつくりになった歌。

「春が過ぎて、夏がやって来たらしい。まっ白な衣が干してある天香久山には。」 といふふうに訳をつけてみました。で、これ、「天香久山」、私ですねえ、大学院の時に、天香久山に上ろうと思つて、結構そこそこ高い山かと思つてたんです。歩いて実は10分で登れる山なんです。丘なんです。

そうするとですねえ、天香久山といふ表現が気になってくるわけですね。「なんでこんな低い山を、天香久山といふのか？ 歩いてみないと判らないこともあるなあ」と、思ひました。そうやって、「万葉集」を見てみますと、いふ歌があります。鴨君足人の香久山の歌一種。このあと、万葉歌、朗読させていただきますが、実をいふと、私の万葉の歌の朗読といふのは、あの、人気がありまして、NHKのラジオ深夜便でも一番今人気があるらしいんですが、あの決してもったいぶつていふわけではありませぬが、あの、ちょっと、目をつぶつて聞いていただきたいんです。

鴨君足人香久山の歌一種、

♪ 短歌を合わせたり、あもりつく天香久山、かすみたつ春に至れば、松風に池波たちて、桜花、このくれしげに、おきべには、かもつまよばい、へつへに、あじむらさわぎ、もしきの、おおみやびとの、まかり出て、遊ぶ舟には、舵さおも、なくてさぶしも、漕ぐ人なしに、舵さおも、なくてさぶしも、漕ぐ人なしに。 ♪

いかがでしょうか？ この冒頭の、「あもりつく」という表現があります。

「あもりつく」というのは、これは、天から降ってきたという意味であります。天から降ってきた山だから、実を言うと、低くても天香久山なんです。で、伊予の国の風土記の逸文という、まあ風土記のものを書き写したもののの中にですねえ、伊予の国に天山という山がありますよ。その山は天から山が降ってきた時に、「中心のほうは、奈良の飛鳥に降って、もう一方の山は、この地にふったんですよ」という伝説があります。つまり、天から降ってきた山だということです。つまりそれは、天香久山というものは、天から降ってきた山で、天に一番近いところであるという思想が古代にあったわけでありまして、と、するならば、一番、季節の変わり目が早いところだというふうな考え方を、古代の人は持ったわけでありまして。

一番初めの歌に戻ってください。

春が過ぎて、夏がやって来たらしい。確信して言います。「なんで？」白妙の衣が干してある天香久山には。おそらく、この白妙の衣というのは、何らかの年中行事、例えば、衣替えであるとか、これから田植えをする前に、田植えをする衣装を干すとか、そういうような行事であったのだろうというふうな、思われるわけでありまして。そこで、資料をひっくり返していただきたいのですが、この天香久山の場所を確認していただきたいと思っております。大和三山を確認していただきたいと思っております。天香久山・耳成山・畝傍山という。で、ちょうど間に藤原宮があるのです。そして、「万葉集」に収められている歌の中には、香久山のことをなんと表現しているかといいますが、「大和の青香久山」と表現しています。青というのは、グリーンなんです。さて、青は東を表します。東は、春を現します。青春という言葉があるわけです。つまり、都の東に、天から降ってきた山があるというような考え方を持っていて、万葉の時代の人は持っていて、持統天皇は、そこに衣が干してあるから、「ああ、夏がやって来たんだなあ」ということを考えたのであります。万葉の時代というのは、飛鳥の時代が592年から692年。藤原の時代。まさにこの時代であります、694年から710年。

そして、平城京が710年から784年であります。まさに、この場所を闊歩していたのは、額田王であったり、柿本人麻呂であったり、持統天皇であったりするわけです。で、この飛鳥の移転地がどこであるかという、ここから藤原に行き、そして藤原から平城京に行くわけでありまして。で、それが万葉集の都である。それが、日本の古代国家の形成時期と重なるわけでありまして。そうすると、例えば、京都と言え、1つは「庭」ということでありますが、京都の庭園文化の源流というものを、飛鳥に求めることが出来ます。飛鳥には方形池とって、四角い池と曲池とって、曲がった池があります。これが島宮というところで発見されたりとか、最近では明日香峡跡の園地遺構で発掘されています。まさに曲がったところを歩きながら、歌が作られたわけでありまして。

さらに仏教文化というようなものも、この地に根付き、そして天平の時代花開き、そして京都に根付いていくわけでありまして。で、そういう意味でいうと、「万葉集」を学ぶというようなことが、日本の歴史のひとつのなにか頂上に立って、そしてそれから、徐々に、歴史と言うものの広がり、私たちが実感していく、1つの機会になるのではないかと、ということでありまして。で、この地に建てられたのが、実を言うと、「万葉文化館」という建物であります。

「万葉文化館」は3つの部門から成り立っております。1つはこれは、日本画であります。日本画150点。平山郁夫先生、高山辰雄先生、加山又造先生、ほとんどの日本画の重鎮の作品を網羅いたしました。15億円の費用を落として、奈良県が日本画を購入しております。

さらには、万葉の時代を体験できる、博物館施設がございます。つまり、美術館と博物館がくっ付いて、研究部門があります。「万葉古代学研究所」でございます。その「万葉古代学研究所」が、

私が奈良大学とともに、務めてるところでありますけれども、そういうところが出来ました。

是非ですねえ、ここにお見えになっていただきたいと思うわけであります。

3月1日から5月20日までは、「喜びの春」という。これも実を言うと、女子大生に人気投票させると、1番になった絵がこれでありまして、

「春の園、紅匂う桃の花、仕立てる道にいでたつ乙女」という歌であります。

で、私自身、高山辰雄先生とか様々な日本画の先生のスケッチに同行させていただきました。そんなことも含めて、いろんな万葉の日本画、さらには、展示物に係わる、私自身の思いもあるのでありますが、そんなことをお話いたしまして、私のミニ万葉講座のプレゼンテーションの綴じ目とさせていただきます。ありがとうございました。

5. 鉄道各社の取り組み

①東海旅客鉄道株式会社 営業本部販売促進課課長 佐々木直人氏

JR東海営業本部 販売促進課で宣伝観光を担当しております、佐々木と申します。本日は、当歴史街道フォーラムの中で、貴重なお時間を頂戴し、ありがとうございます。歴史街道計画に直接関係があるというわけではございませんが、京都～奈良に関する鉄道会社の取り組みというお話でございましたので、私どもで展開をしております「京都キャンペーン」というものにつきまして、ご紹介をさせていただきます。

まずは、テレビのコマーシャル等で過去に流しました映像を、いくつかご覧いただきたいと思えます。最後に流れます天竜寺を題材といたしましたバージョンなのですが、こちらは、ちょうど、2月23日から、「京都キャンペーン」の2002年、春編ということで、展開を予定しているものでございまして、まさに初公開の映像でございます。明日から、首都圏でも、この映像のテレビスポットが流れますので、ご記憶にいただければ幸いです。それではご覧いただきたいと思えます。

(JR東海京都キャンペーンVTR放映)

ありがとうございました。

当社では、平成5年秋から、今の映像にもございましたが、「そうだ。京都行こう。」というキャッチフレーズで、地元京都市、それから京都市観光協会様のご協力をいただきながら、「京都キャンペーン」という、いわゆる「ディズニーションキャンペーン」を、主に首都圏を中心に、継続して展開をしてきております。約8年が経過しておりますが、訴求の仕方というものは、その時々で、若干異なるものの、日本の財産であります。

観光地、京都のもつ魅力につきまして、四季折々の美しさを、寺社仏閣の表情を含めて、幅広い年齢層の方々にお伝えをして、京都への興味関心を抱いていただいて、それが、「京都へ出かけてみよう。」という、旅行意欲というものにつながって、結果として私どもの東海道新幹線をご利用いただくことが出来ればという思いで、こういった情報発信というものを続けております。

基本的には、今ご覧いただいたような、まあかなり手前味噌ではございますが、美しい映像と、それから季節感あふれる音楽、そして、長塚京三さんの独特の言い回しによりますナレーションが、絶妙のバランスで一体となって、より多くの方に「あ、京都っていいなあ。あの空間に自分も身をおいてみたいなあ」というように、思っていただくことが出来るというふうに確信しておりますテレビコマーシャル、それから、美しいビジュアルを中心といたしましたポスター・新聞それから雑誌広告といったもので、キャンペーンを展開しております。

本来であれば、1年を通して、こういったテレビコマーシャルというものを流すことが出来ればいいんですが、まあ限られた資源ということもございまして、最近では、その手法も若干の工夫を凝らすようにしております。

1つは、インターネットのホームページの情報提供ということで、当社のホームページの中に「京都キャンペーン」の専用コーナーを開設をいたしまして、その季節、季節で、取り上げております、寺社仏閣の情報を、掘り下げて解説をさしていただいているほか、大手旅行会社様のホームページとも、リンクを張りまして、「京都を訪れるお得なツアー」につきまして、お客様、皆様方がいながらにしてですね、検索が出来るというような中身にしております。

それから、キャンペーンで、テーマとしている寺社仏閣の情報を満載をいたしました、「専用ガイドブック」というものを作成して、当社の駅窓口でありますとか、大手旅行会社様の店頭で、幅広く配布をさしていただいて、テレビコマーシャルとか、ポスターをご覧いただいて、興味を抱いていただいた方の関心をさらに高めまして、実際に京都にお出かけいただくきっかけづくりという